

筑波技術大学卒業生アスリート「スポーツとキャリア発達」

長屋宏和氏

すいません。はじめまして。長屋宏和と申します。マイクを使わせてもらっているのが、僕がこの障害だと肺活量が弱いので、皆さんに聞こえづらくなるのが嫌なのでマイクを使わせて頂いてます。今日はよろしくお願いします。

2002年の10月13日のF1日本グランプリの前座レースで大クラッシュをして、今のこの車椅子の生活になってしまったんですけど、それまでは何気ない普通の健常者として普通の生活をしていました。それが事故によって突然この車椅子、まあ今は車椅子だけど、最初はもう寝たきりで、気管切開をして、言葉も話せなかったり、動かせるところは、左手の手首を曲げることしか出来なくて、いきなりその生活になったことが、全く最初は受け入れられなかったです。自分が何をしていけばいいのか本当に分からなかったし、この先どうなっていくのかというのも分からなかったのが、一番最初の印象でした。夢を見てるのかなって思っていました。

時間が経つにつれて、自分の身体の状態というのが分かって来た時に、この先、この生活を自分は受け入れるべきなのかというところに一番悩んだし、やはりレースがずっとしてきたことで、レースが出来ない悔しさというのが残っていました。

皆さんが突然、じゃあ明日から自分と同じ障害になったということは、想像は、実際に車椅子で外出した時に、ちょっと段差があったり、坂道で漕ぎづらいたらうなっていうことは分かると思うんですけど、じゃあ自分の生活で、玄関を開けて家に入る時に段差があって入れなかったり、お風呂にどうやって入ろうとか、トイレはどうするんだらうな、実際そこまで考えると、明日自分になることっていうのはすごく考えられないし、僕も考えられませんでした。

その状況が実際に今、今日もそういう人が、たぶん車で事故したり、突然病気で車椅子になってしまっている、障害になってしまった人が、そういう方がすごく多いのかなっ

で思うので、これからどんどんどんそういう方が増えていくと思って、自分がもしなった時のことを考えて、僕のこの講演を聞いて頂けたら嬉しいです。

事故をして、寝たきりで突然この車椅子の生活になってしまって、じゃあ何をしていけばいいんだろうって思った時に、自分にはレースしか無かったんです。でもそのレースをすることが出来なくなった自分というのが受け入れられなかった時に、いつか自分がそうやって、また復帰できる目標を持ち続けることというのは、常に僕の気持ちの中で思っていることが、根拠のない自信に繋がっていったんですね。自分の身体のことを、家族だったり、周りの仲間に今後どうなっていくのかっていうことを聞いても、みんな、リハビリ頑張っていればまたレースに復帰できるから、宏和、大丈夫だから頑張っっていう言葉をずっと入院生活中も、ずっとその言葉をもらっていたんですけど、でも、3か月経っても半年経っても、自分の身体がいつか歩けるっていうことは想像が出来なかったですね。誰に聞いても同じ答えをもらった中で、その真実を聞くためには、担当医の先生からその言葉を聞くことというのが一番正しい事なんだと思って、勇気を出して、自分がこれからどうなっていくのかと、レースに復帰出来るのかということ聞いた時に、長屋君は一生車椅子で、レースにも復帰出来ないっていう言葉を聞いた時に、仲間にだまされた気持ち、なんかすごくそれがショックで、この先自分が生きていく意味があるのかな、これから先どうしていけばいいのかって、全く見えなくなって、もう本当に死んでやろうかと思いました。それが事故して半年ぐらいの時です。

ちょうどその夜に、幼馴染がお見舞いに来てくれて、その先生から言われたことをそのままぶつけたんですね。そうしたら、俺はそんなことは信じて無いし、宏和がまたレースに復帰してくれるって俺は信じてるからって、その言葉を聞いた時に、僕が前向きじゃないと、周りの皆さんに申し訳ないなって思ってしまって、だったら自分が前向きになって、周りの皆さんに元気だったり勇気だったり、何か恩返し出来ることを考えて、この先生活していこうって思えるきっかけになりました。

やっぱりレースっていうのは、常に自分は、自分の中心であったので、2年間の入院生活もレースのことを、レースをまた復帰できるように、頑張るために、リハビリも頑張れたし、嫌なことも耐えられたし、その1つの自分の軸というものがあったから、何で

もつらいことも頑張ることが出来ました。それで2年間のリハビリを終えて、2004年の12月にレース、カートレースですけど、レースに復帰した時に自分が昔、当たり前に行っていたアクセルブレーキの操作だったり、自分の感覚でステアリングを曲げたりしていた感覚が全く出来なかったですね。その時に初めて自分のこの障害に気付いて、それを受け入れることが出来たんです。それまではもういつか自分も歩けるかもしれないから、そのために頑張ろうって思ってたし、でもその気付きを一生送る障害のこを受け入れられた時に、このままレースを追い続けているだけでは、自分の人生をだめにしてしまうなっていうことに気付いたんです。やっぱり人生は仕事してお金を稼いで、楽しいことだけではなくて、死ぬまでの人生設計というのを考えていかなければ、自分がだめになるし、周りもだめになってしまうってその時に気付かされました。

ちょうどその時に、僕が本田の契約ドライバーだったので、本田さんにご挨拶に行った時に、自分が着たい、それまでだったら当たり前のようにスーツで本田さんにご挨拶に行くのが、スーツじゃなくてジャージでしか行けなかったですね。着たい洋服が着づらかったり、着れなかったりしてしまって、ジャージで行った時に、なんでこの車椅子の生活になっただけで、着たい洋服が着られないんだろうって思って、ちょうどぼくの母親が洋服のリフォームの会社をずっと、もう今で36年やっているんですけど、それを母親にこういう悩みがあって、僕でも着られる洋服を作れないかっていうので、初めてそれを伝えて、自分のために最初は作った洋服が、それを周りの友達がそれ僕も欲しいっていうふうに言ってくれたので、これをじゃあ第二の自分の人生の仕事としてスタートしようかと気付かせてくれました。

こういうきっかけもそうなんですけど、事故してもそうですし、今回の仕事のこともそうですし、レースのこともそうですけど、やはり僕一人ではなくて、周りの仲間にごく支えられていることに気付けたんですね。僕一人ではたぶん何も出来ない。例えばここまでも電車に乗って、スロープ出して頂いたり、朝のヘルパーさんに来て頂いたり、僕一人では何も今のこの生活というのは出来ていないですけど、でも、そこを皆さんの力をお借り出来て、生活出来ていることなので、その感謝の気持ちを言葉としてお伝えしていかなければいけないなということ、今、この障害を負って気付かせてくれたことです。

車椅子のファッションを僕がやっているのも、気付かせてくれたのも、この障害のおかげですし、この活動をどんどん伝えていくことで、パラリンピックの選手に車椅子レーンコートを提供させて頂いたり、内閣総理大臣奨励賞という、すごい賞を頂けたりしましたけど、でも、これって車椅子の生活になって、この仕事に気付けたから出来ていることで、もし事故してなくて、レースだけをしていたら、たぶんそんな賞は絶対に頂けていない。第二の人生として気付かせて頂けたことで、絶対に健常者だった自分には、今の自分は負けたくないって思っているんで、当時の、今、僕が40歳なんですけど、事故しない40歳と比べて、今のこの車椅子の生活の時のほうが、自分として、人として成長しているようになれたらなって思いながら、仕事もレースも考えながら生活しています。

僕の基準として、仕事もそうですし、レースもそうなんですけど、やれるやれない、やりたいやりたくないっていう基準があって、それは楽しいか楽しくないかなんですよね。例えば、今日この講演をさせて頂くのも、皆さんにお伝えして、何か楽しめることがあるなって、僕が伝えて皆さんが楽しんで頂けたり、何か持ち帰ってこれからの人生で何かプラスになったりしてくれていたら嬉しいなっていうことで、そういう基準で僕は全てのことを、もちろん仕事もね、嫌なこともあるし楽しくないこともあるんですけど、でもその中でもやはり楽しむことを見つけたり作ったりして、嫌な事も楽しむように僕は考えていろいろ活動をしています。

その中で、車椅子だから出来ないということってというのは本当は嫌で、車椅子だから出来ないってのが気付いたらそれを変えていきたいなと思う中で、一つの挑戦として、富士山が僕が好きだったので、富士山見た時に、あ、すごいな、車椅子じゃ無理だよなって思う場所だったんですけど、でも、車椅子の生活になって、出会った皆さんを、点と点だった皆さんをつなぐことで、もしかしたら行けなかった場所も行けるようになるんじゃないかなっていうことを気付いて、それを提案して、4年前から車椅子で富士山登頂出来るように頑張ってます。去年は8合目まで登ることが出来たので、一昨年は7合目だったんですけど、去年は8合目で、今年は頂上行けるようにも頑張って、それも皆さんと楽しめるっていうことを再優先に考えて、自分よがりじゃなくて、自分がもち

ろん行きたい気持ちもありますけど、自分が絶対にその芯を曲げずに、周りの皆さんと一緒に楽しむことを共有して、挑戦してます。常に富士山もそうなんですけど、最悪の状況を考えて、富士山もそうですし、レースのこともそうですし、仕事のこと、今の全てのことなんですけど。例えば仕事だったら、金銭面の、お金のことをやはり一番心配しながら、考えているので、例えば、もちろん仕事が景気悪くなって潰れたらどうしようっていうことを考えながら、常にそれがあって、道をいろいろ選んで、その選択する決断は自分で持ちながら仕事をしてます。最悪のことを考えないと、何もかもが揺らいでしまうと思っているので、そのための一つの方法として、最悪のことを考えています。

夢は、僕はこんな車椅子の生活ですけども、夢は F1 ワールドチャンピオンという、夢はでっかく持ち続けていて、それはもう誰が見たって、自分だって分かっているけど、今の状況では到底難しいのも分かるけれど、でもそのでっかい夢があることで、小さな目標をたくさん作っています。今日一日頑張るでもいいですし、本当に英語を頑張って勉強したいなって思うこともそうですし、そういう目標があることで夢にどんどんどんどん一歩一歩近づけるんだと思ってます。

あとはやはり感謝の気持ちを、自分で思うだけではなくて、言葉として発信していくことは必要なのかなって思います。これも車椅子の生活になる前は人って冷たいのかなって思っていましたけど、でも、こういうふうな街に出て、バリアフリーでもスロープがきつくて登れなかった時とかあるんですけど、そういう時も周りの皆さんがそれを見て、気兼ねなく本当に声をかけてくださる方ってこんなに多いんだって思うし、そういう方に、最初の頃はなぜかすみませんって、僕、言葉にしてしまっていたんですね。でもなんで、ありがとうって感謝の気持ちの時に謝ってるんだろう。ここって、感謝を伝えるのに、ありがとうって言葉を伝えるべきなんだろうなという意識を自分の中で変えて、ありがとうって、本当にちょっとしたことでも言うようになったら、お互いが笑顔になっていったんですね。これを僕は日常の SNS の中で毎日のありがとうっていうことを書き留めることで、この感謝を振り返ることが出来るんで、ありがとうをその場でスルーするんじゃなくて、意識を持って、感謝の気持ちを持ち続けることっていうのは、大切なのかなって。

あとは、人生は笑顔で、常に前向きに思ってることが一番必要だと思うし、人生は無駄なことは何一つ無いと思うので。僕もレースやっていて、全く違うファッションの仕事は今させてもらってますけど、レースやってる頃の自分の経験が今の仕事でも生きてますし、逆をいって、今のこの仕事でレースやっていた時にこのことを知っていたらもっとプラスに役だっていたのかなと思うこともたくさん出て来ているので、そういったことって、僕が車椅子の生活になって気付きましたけど、でもまあ人それぞれ、その気付きていうのは違うと思うんですけど、でも、その気付きは絶対にあると信じてますし、その気付いたことをスルーするのではなくて、一つ一つ次に活かして改善していくきっかけだと思うので、そういうことをメモしてでもいいですし、僕の場合は SNS に書き留めることが振り返るきっかけにもなっているので、その方法は一人一人違ってもいいと思うんですけど、でも意識することは必要なのかなと。

僕はこうやって車椅子生活になってしまいましたけど、でも人生、最初の頃はなんで車椅子に、自分がなんでなってしまったんだろうって思いましたけど、でも今となっては、すごくこんな生活は不自由になっていきますけど、人としてすごく成長出来るきっかけを頂けたのかなって思います。もし、2002年のあの事故してなくて、レースで順調に行っていたかもしれないけど、じゃあ今のこの40歳の自分と比べたら、人としてどうかなって思うと、事故してよかったとはあまり思いたく無いんですけど、でもまあそう思える自分が今いるっていうのは幸せなのかなって。そういう幸せだったり、笑顔だったり、皆さんもそういう気持ちで、今までもそうですし、これからもそういう意識を持って生活して頂けたらなって思います。

僕は常に、先程もお話した楽しいことと笑顔とを意識して、これからもこういう講演だったり、みなさんにお伝えしていけたらなって思いますので、これからも何か SNS だったり、今日のことを、気付いたことをどんどん発信して頂けたらなって思います。

拙い講演でしたけど、ありがとうございました。

